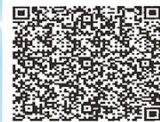


徳島市民病院だより



〒770-0812 徳島市北常三島町2丁目34番地 徳島市民病院
Tel(088)622-5121(代表)

平成28年
11号
平成28年9月

徳島市民病院の理念 「思いやり・信頼・安心」

産婦人科27年度実績 がん治療が大幅増

徳島市民病院産婦人科はこれまで婦人科腫瘍専門医が不在でがん治療を積極的に行っていませんでしたが、院内がんセンターの設立に伴い2015年4月から婦人科腫瘍専門医を招聘してがん治療が出来る体制を構築しました。ちなみに婦人科腫瘍専門医は大学病院、徳島市民病院、鳴門病院、総合健診センターに各1名ずつ県内に4名しかいません。また2016年4月から「市民病院がんセンター・婦人腫瘍科」を標榜しています。現在は頸がんの腔内照射(外照射は可能)以外のすべての症例を積極的に受け入れています。

表1は過去4年間の産婦人科の実績を示します。分娩数はもと多かったです。さらに増加傾向で年間700件に迫っています。手術件数も増加傾向で2015年は2012年に比して1.3倍に増加しました。がん患者数は顕著に増加し、2015年度は外来延べ患者数は2倍、入院延べ患者数は2.6倍に増加しました。表2は2014年度の県内の主な病院の産婦人科の実績ですが、分娩件数、手術件数とも県内屈指の



(表1) 産婦人科(周産期センター) 実績

	H 24	H 25	H 26	H 27
分娩数	650	662	679	698
手術件数	451	488	526	597
外来がん患者数(延)		674	645	1337
入院がん患者数(延)		67	76	198

(表2) 平成26年度 各病院実績

	分娩数	手術件数
徳島市民病院	679	526
徳島大学病院	645	619
県立中央病院	204	322
徳島赤十字病院	719	609

症例数になりました。手術実績ですが、2001年からこれまでに1859件の手術を執刀しています。このうち子宮頸がんが134件、子宮体がんが280件、卵巣がんが134件、外陰がん16件、CIN(子宮頸部の非浸潤性初期病変)796件です。子宮筋腫や卵巣嚢腫などの良性疾患の多くは腹腔鏡下手術で行われますが、一昨年少子宮体がんが適応が拡大されました。当科でも院内倫理委員会の承認を受けてこれまでに4例施行しています。現在は初期の体がんが対象ですが、今後はリンパ節郭清が必要な症例にも拡大していきたいと考えています。CINについてはサージトロンとレーザーを用いた非侵襲的な治療で若い女性の子宮をそのままの形で温存し、将来の妊娠出産に影響が無いようにしています。全国の他の施設では円錐切除レーザー蒸散のいずれかが選択されており、当院の方法は非侵襲的かつ病巣の病理学的な診断の確認ができる良い方法であると自負し

市民病院 “えとせとら” 5

Q. 診察の待ち時間を減らすためにはどのようにしたらいいのですか？

A. 徳島市民病院は、救急・紹介・専門外来を中心とした急性期医療を担う病院として、地域医療機関との役割分担を行うとともに「かかりつけ医」と連携して、患者さん

へ充実した医療の提供に努めています。そのため、次の順に診察の待ち時間が短くなります。

- ①「かかりつけ医」からの紹介状をお持ちで、「かかりつけ医」から事前予約がある方
- ②「かかりつけ医」からの紹介状をお持ちで、事前予約がない方
- ③再診予約されている方
- ④再診予約も紹介状もない方など

※ただし、急患の場合はこの限りではありません。各診療窓口へ申し出てください。

（古本博孝副院長兼地域周産期母子医療センター長）

ています。また進行がんについては手術、放射線、化学療法を用いた集学的治療を最後まで諦めずに行っています。アンジェリーナジョリーが予防的に乳房・卵巣卵管を切除したことで有名になった遺伝性乳がん卵巣がん(HBOC)の遺伝子検査(約25万円)や治療も可能です。今後がんセンターとして、県内の婦人科がん治療に取り組んでいきたいと考えています。

「あんしんカード」の論文で



第36回徳島医学会賞（医師会関係）を、徳島市民病院の蟻井岐美副看護師長が受賞しました。28年度夏季学術集会で賞状などが授与されました。蟻井さんの研究内容は「『あんしんカード』を用いたがん患者の救急医療体制の構築と病病・病診連携の試み」。

市民病院のがんセンター開設に合わせ、救急医療が必要となる進行再発がん患者を対象に発行・運用がスタートした「あんしんカード」の狙いや運用の仕組みを紹介するとともに、1年間の運用結果の分析や、そこから見えてきた課題について検討・分析を試みました。

蟻井さんによると医学会での論文発表は三宅秀則院長の推薦。柿内聡司がんセンター副センター長の指導を仰ぎながら取り組んだそうです。受賞決定は「信じられませんでした」と率直な感想を述べた後、あんしんカードの今後について「患者さんや連携医からの要望も強い。さらに普及することを願っています」と話しています。

徳島医学会賞は平成10年に創設され、年2回の学術集会の応募演題の中から最も優れた研究に対し、大学関係、医師会関係それぞれ1人に贈られています。

市民公開講座に106人 “加齢と病気”をテーマに開く

徳島市民病院の医師による市民を対象とした公開講座が7月30日にふれあい健康館で開催されました。

第1部は大木武夫眼科主任医長による「加齢に伴う目の病気」とする講演でした。眼瞼下垂などの眼瞼疾患、ドライアイなどの涙器疾患、角結膜疾患、白内障などの水晶体疾患、屈折・調節異常、加齢黄斑変性症などの網膜硝子体疾患、緑内障など、加齢に伴いやすい疾患をひとつずつ丁寧に説明されていました。

第2部は高橋久弥泌尿器科主任医長による「加齢と排尿障害」とする講演でした。尿を出すことと貯めることの障害に分けた説明があり、出すことの障害として男性に代表的な疾患である前立腺肥大症や、貯めることの障害として女性に多い尿失禁など、それぞれ疾患ごとに分かりやすい図解を用いた説明がありました。

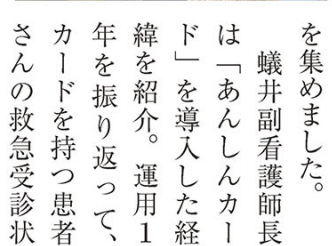
登録医の先生方との連携を深めるため、徳島市民病院主催の第28回地域医療連携会が7月7日、徳島市内のホテルで開かれました。当院の取り組みを紹介する講演があり、市民病院がんセンターの柿内聡司・副センター長が「最新の肺がん薬物療法」徳島市民病院がんセンターの取り組み「患者支援センターの蟻井岐美副看護師長は『あんしんカード』1年間の報告」病病連携・病診連携に及ぼす影響と今後の課題」のテーマ

登録医、当院医師ら130人参加

でそれぞれ発表しました。柿内副センター長は自らの専門分野である肺がんの新薬で最近話題を集めているオプジーボ（一般名ニボルマブ）をはじめ、大きく変わってきた薬物療法の理論やメカニズム、治療実績などを紹介しました。また、本年度以降に承認予定の新薬についての最新の情報も披露し、関心

を集めました。蟻井副看護師長は「あんしんカード」を導入した経緯を紹介。運用1年を振り返って、カードを持つ患者さんの救急受診状況、緩和ケア病床における転帰、今後の運用改善に向けた課題などを説明しました。続いて開かれた懇親会では、当院の新任医師や臨床研修医、各診療科の紹介などがあり、豊崎徳島市医師会長の挨拶の後開宴。参加者は和やかな雰囲気

地域医療連携会開かれる



柿内聡司がんセンター副センター長

豊崎徳島市医師会会長

市民病院まつりにぎわう 親子連れが催しに歓声

第7回徳島市民病院まつりが7月23日（土）に開かれ、650人を超える市民が来場しました。今回から実行委員会（委員長：弘田昌紀事務長）が企画・運営に当たり、「笑顔 ふれあい 市民病院」をテーマに数多くのイベントが行われました。

バルーンアートなどで華やかに飾られた院内を会場に午前9時に開幕。毎年人気のこどもお薬教室は早々と長い行列ができました。病院ならではの手術用ナビゲーションシステムの操作体験や、内視鏡検査機器、腹腔鏡手術の展示コーナーをはじめ、手洗い教室、X線で見ようでは実際に機器を使ったイベントを楽

しんでいました。玄関前の交通安全教室では本物のパトカーの車内を見学していました。

田村公一耳鼻咽喉科総括部長の「あんだこの頃むせーへんで？ 誤嚥性肺炎の3つのチェック」や、県歯科医師会によるお口のチェック、体力テスト、健康度測定などは年配の来場者の姿が多く見られました。

アトラクションのゲスト・徳島少年少女合唱団の美しい歌声と浴衣姿に着替えてのたのしい演出、福富弥生コンサートでは徳島らしさのこもった弾き語り

に大きな拍手が送られました。開始前に行列のできたバザーやお茶会、パン・お菓子の販売コーナーや、脱毛・ネイルケア、ハンドマッサージなども好評でした。



こどもお薬教室



徳島少年少女合唱団 バルーンアート



リレー版 研修医日記

臨床研修医

米田 直樹

徳島市民病院の研修医2年目の米田直樹です。

徳島市民病院で研修をさせていただき、もう1年と5カ月が経ちました。様々な科で研修させていただき、多くのことを経験、勉強させていただいております。

この約1年半の研修生活の中で経験したことや印象に残ったことについて書かせていただきます。

まず、研修がスタートした当初は実際の臨床現場がどのように動いているか、学生の時の臨床実習では見ることができなかったものに対する不安感や不慣れがありましたが、指導医の先生方やコメディカルスタッフが優しく教えてくださり、徐々に研修医として臨床に励むことができるようになったと思います。

今では1年半がもうすぐ経過しようとしていますが、以前に受け持ちだった患者さんや救急外来で診療した患者さんやご家族に病院内で会うことも多くなり、「先生、久しぶり！今は何科におるん？」「おかげさまで今は元気にやっています。」など話しかけていただく機会も増え、日々、患者さんに診察や話をすることに対してのやりがいや興味深さを実感しています。

私は将来は外科系に進むつもりであるため、手術症例が多いのも徳島市民病院の利点であると思います。また、研修医でありながらもさせていただけることもあり、将来につながる実りのある研修をさせていただいています。まだまだ上手くないことも多く、毎日のように反省すべき点が見つかりますが、一つ一つ自分で考え、先生方から学びながらステップアップできれば、と思っています。

初期研修も残すところあと数カ月となりますが、まだまだ成長できるように精一杯努力していきますので、よろしくお願い致します。



眉誠連 阿波おどりに参加!!

徳島市民病院の阿波おどり愛好家有志でつくる眉誠連（連長：住友弘幸）が今年も徳島市の阿波おどりに参加しました。初日の12日、約100人の大編成で新町橋無料演舞場などに踊り込み、心ゆくまで満喫しました。



参加したのは曾根三郎病院事業管理者や、三宅秀則院長をはじめとする職員、家族ら。午後6時から市民病院1階ロビーで入院患者さんのためにひと踊りを披露した後、住友連長が「いつもは患者さんの治療に頑張っていますが、今日は晴れの舞台で精一杯踊ってきます」と元気よく挨拶し、バスで市中心部へ移動。本場の踊り天国で乱舞に加わりました。

今年新調した篠笛、三味線など、お囃子も練習の成果で音量たっぷり。手持ち提灯も踊りに活気を加えました。住友連長によると「皆さん明るく踊りを楽しんでいました」と話していました。

書家・浜さんの作品寄贈 患者支援センターに展示

近代詩文のジャンルで県内の代表的な書家の一人である浜佳香さんの書作品3点がこのほど



▲患者支援センターに掲げられた作品と作者の浜佳香さん

徳島市民病院に寄贈されました。

いずれも全紙より少し大きいサイズの横長の作品。1階の患者支援センターに掲げられたのは「いま生きていくこと しょうけんめい生きること なんてなんてすばらしい」。濃墨で力強い筆致の作品。東日本大震災の後、復興を願う合唱曲として歌われた「あすという日が」（山本櫻子作詞）の詞の一節です。

濱さんは「病気の患者さん、ご家族の皆さまが少しでもお元気になっていただき、勇気づけ、癒しの空間になれば」と話しています。

残り2点のうち、一つは管理者室に。「空と海がとけてひとつあなたの心にとけて生きる。」「ひ

とつ」（高橋晴美作詞）の歌詞から取られた作品で、淡墨が印象的です。また院長室に飾られたのは題名「福島三春の瀧桜」。樹齢千年の瀧桜から生きる力をもたらう」と書かれています。

濱さんは久保幽香さんに師事し、書作を開始。現在、毎日展会員、創玄展一科審査員、東玄書道会代表などを務めています。平成4年には県書道展で大賞も受賞されました。自らの作風を「誰もが読み、親しめて、しかも心に響く言葉を選び、作品として定着させる」と語ります。

書家として活躍する傍ら徳島大学病院で看護師として長く勤務した経験があり、曾根三郎管理者と旧知の間柄だったことから、今回の寄贈が実現しました。

四国銀行が軽自動車寄贈

当院の地域連携活動に活用

四国銀行から徳島市民病院へ軽自動車が寄贈されることになり、7月27日に病院玄関前で贈呈式が行われました。地域貢献の一環として寄贈が決まったもので、式には双方の関係者約30人が出席。四国銀行の大田良継常務取締役から、三宅秀則院長にレプリカキーが手渡されました。

贈られたのはホンダのワンボックスカーN-BOX。前部ドアに徳島市民病院を略した「TMH」、後部ドアには徳島市のマスコットキャラクター・トクシイのイラストと



「患者支援センター」のロゴが施さ

れています。車両は患者支援センターに配備され、県内一円の連携医療機関の巡回訪問などに活用する予定です。

贈呈式では三宅院長が「よりきめ細やかな医療・福祉サービスの提供に役立ててまいります」とお礼の言葉を述べました。

がん豆知識

⑤

乳がん

がんの治療に早期発見早期治療が有効であることは間違いありません。乳がんも同じで、検診で発見される乳がんは早期のものが多く普通に治療をすれば完治もめずらしくあります。徳島市の乳がん検診率は21%と低いですが、乳がん好発年齢である40歳から54歳では実は50%を越えています。もちろん80歳を過ぎて発症される方もありますのでもっと検診率を上げる必要があります。

乳がんは、乳房内の乳管という母乳を運ぶ管の中から発生しやがて乳管の外に広がります。そして乳管の外にある血管やリンパ管を通じてリンパ節や骨・肺・肝などの他の臓器に移ります。検診をすることでできれば乳管の中の状態であるいは乳管外に出たとしても小さなうちに見つける事が大切なのです。

ところが、検診を受けて異常なかったにもかかわらず次の検診までに乳がんが

発症することがあります。しかもこのような乳がんは患者さん自身が気付くほどの大きさになっていないことがまれではありません。このように2年の検診の間に見える乳がんを中間期乳がんといいます。前回の検診で見落としたわけではなく、本当に短期間で腫瘍が大きくなっていくのです。このような乳がんは検診で見つかる乳がんより経過が悪いといわれています。

中間期乳がんを発見するには、まずこのような乳がんがあることを皆さんが知り、月に一回自己検診をすることが大切です。大方の人は乳がんを触った事が無いので自分で見つけれられるのか不安でしょう。まずは普段から自己検診をすることが大事です。そして以前に無かったしこりを触る、乳腺の固さに左右差がある、乳首から血が出る、乳房の一部にえくぼができる、等の症状が出たときは、是非専門医を受診してください。また乳腺の痛みは乳がんの症状では無いことが多いですが、しばらく検診をしていない人は痛みをきっかけに一度受診して下さい。調べると痛みと別の所に乳がんが見つかることもありますよ。

（外科 日野 直樹）